令和３年度　学校評価報告書（実施結果）

	視点	４年間の目標 (令和２年度策定)	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 22 日実施）	総合評価（３月 28 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①学校のミッション、生徒の実態、教育ニーズに即した新たな魅力と特色づくりを推進する。 ②インクルーシブ教育実践推進校としての取組を推進する。 ③これからの時代に必要な資質・能力を育成するため、主体的な学びの向上、探究的な学びの推進、グローバル化・ＩＴ化への対応を見据えた取組を行っていく。	①令和４年度から実施の新教育課程に向け、各教科で準備を進めていく。 ②中高連携事業、研修、外部との連携等を通じ、共生社会の実現に向けたインクルーシブな学校づくりをさらに推進する。 ③1 学年を中心にＩＣＴ（iPad）を活用した授業研究を進める。	①新教育課程について、生徒のキャリアニーズや探究的な学びの習得に向けて、科目の内容や選択の仕方など細かい調整を行う。 ②連携生を対象とした学校設定科目の内容のさらなる精選と指導と評価方法の充実化を進める。 ③ＩＣＴを活用した学習の推進を図る。 ③指導計画等を踏まえて、生徒が用意する iPad の適切な仕様を作成する。	①新学習指導要領の精神と学校教育目標をふまえているか。 ②学校設定科目の内容と個別教育計画に基づいた教育実践及び評価ができたか。 ③ＩＣＴ活用による課題や授業での取組の実践率や活用実績。	①新学習指導要領の精神と学校目標をふまえたうえで、「単元と指導と評価の計画」の作成を行った。 ②自己と社会では、個別教育計画に基づいて教育内容の見直しを定期的に行い、評価に結び付けることができた。 ③ＩＣＴを活用した授業での取組み、課題の配布・回収実践はすべての教科で行われている。 ③iPad に係るトラブルもなく、仕様が適切であった。	①来年度５月に開かれる選択科目説明会に向けて、科目と進路のつながりを校内で共有する必要がある。 ②連携生の評価基準・一連の評価の流れについて、広く職員全体が熟知する必要がある。 ③ユニバーサルデザインーＩＣＴ活用の連携を図り、学習活動について、組織的に活用していく取組みが必要である。 ③取組の実践率や活用実績を一層広げる。	○教育課程に向けて、各教科で準備が順調に進められていることがわかる。 ○学力向上につながる効果的な活用について研究が進められることを期待したい。 ○更に魅力のある学校を目指して頑張ってください。	○新学習指導要領に基づく、「単元と指導と評価の計画」は策定できたが、「指導と評価の一体化」などを確実に実現するために何をしていく必要があるのか、整理していくことが課題である。 ○ＩＣＴの利活用は確実に進んでいるが、より使いやすいハード環境を実現する必要があり、一人一台端末がより広がることから、安定した Wi-Fi 環境を維持・提供できるのかが課題である。	○先進的な授業実践の研究や本格的なルーブリックを策定し、これを評価に用いることを進める必要がある。評価の見える化を具体化する必要がある。 ○ハード環境の整備を行うと同時に、授業中の Wi-Fi 環境についての研究を進め、レッスンクラスの教室配当の策定に活かす。
2	(幼児・児童・) 生徒指導・支援	①自らの夢や目標に向かってチャレンジしながら未来を切り拓いていく力を育成するとともに誰もが霧高生であることにプライドが持てる活気ある学校づくりを行っていく。 ②多様性を受け入れ、他者を認め合い、支え合いながら主体的に課題を解決する力を育成するとともに、「インクルーシブな学校づくり」を行っていく。 ③規律と秩序のある生徒指導ときめ細かい支援体制を確立する。	①生徒主体の行事、委員会、部活動に行うことによってコロナ禍の中での安全な活動について自ら模索させるなど、生徒のチャレンジ精神や課題解決能力等を向上させる。 ②生徒向けの研修等を通じ、障がいに対する理解を深め、互いの良さや多様性を認め尊重する力を育みながらインクルーシブな学校づくりを進める。 ③新たな生活様式による基本的生活習慣の確立と公共マナーなど規範意識の醸成を図るための組織的な生徒指導を実践していく。 生徒一人ひとりの実態に応じたきめ細かな支援体制を確立する。	①感染防止対策を徹底させながら、生徒会本部および運営委員会等を活性化させ、生徒のアイデアを存分に引出すとともに、生徒が思い切って挑戦できる機会を広げ、その活動を支援する。 ②インクルーシブ教育に係る講演を、年間４回以上開催し、障がいへの理解を深め解決に向けて考え実践する機会とする。 ③日常のマスク着用と手洗いの励行。また、食事における会話の自粛など、休み時間の様子を巡回指導等で確認していく。 ③生徒一人ひとりが自分や家族、友人を守る意識付けのための呼びかけやポスター掲示。 ③社会の一員として、他者へ配慮した行動や交通マナーを守る規範意識を醸成するための声掛けなど。 ③ＳＣやケース会議を有効に活用し、生徒に寄り添った支援・協力体制を構築していく。	①行事に関する生徒の満足度が向上したか。生徒の主体的な活動となったか。 ②講演会等を、通し、障がいに対する理解を深め解決に向けて考え実践する機会を設けることができたか。 ③日常における生活マナーができているか。 ③バス乗車指導や自転車指導等を通し、社会の一員としての公共心が育ち、バス乗車時や自転車通学マナーが向上しているか。 ③面談やＳＣ、ケース会議が有効に活用され、生徒の支援が組織的に行うことができたか。	①制限のある中で、生徒自らが感染防止対策を呼びかけ、互いに励まし合いながら試行錯誤を重ね、予定していた行事をすべて実施することができた。生徒それぞれが、多様な経験の中で、多くの困難を乗り越え、自らの成長を実感することができた。 ②各学年に対し１回ずつ外部講師を招いて講演会を実施した。１学年にはインクルーシブ教育に係る校長講話を実施した。1 年生を対象とした事後アンケートは、95%の生徒から、インクルーシブの意義や大切さを実感したという回答を得た。 ③日常のマスク着用や手洗い、うがいの励行はできていた。黙食指導については、今後も継続が必要である。また、コロナ禍での生活様式を再確認できた。 ③自転車通学者やバス通学者の一部に規範意識の低さがみられた。遅刻ｷﾞﾘｷﾞﾘで登校すると交通ﾙｰﾙが疎かになるので、一人ひとりが余裕を持った時間設定をすることが必要である。 ③ＳＣやケース会議は個々に合わせて有効に活用されている。	①緊急事態制限等で活動中断されても、オンライン等も利用しながら、生徒に随時情報を提供し、モチベーションを途切れさせずに目標に向かえるような方策を考え、実践する。 ②各学年で年間１回ずつの実施であるが、さらに授業や学校行事等の普段の学校生活の中で、他者を認め支え合う教育活動を充実させたい。 ③黙食を含め、密の回避など日常マナーを再認識するための呼びかけや啓発ポスターの作成、巡回指導など工夫をする必要がある。 ③基本的生活習慣の確立の中で、時間に余裕を持った生活を意識させることが必要になると思われる。家庭と協力し、高校生活だけでなく、社会に出てからも必要であることを認識させる。 ③今後も生徒一人ひとりに合わせた支援体制を継続させる。	○コロナ禍においても、感染防止策をとりながら、行事を実施することができたことは高く評価できる。 ○インクルーシブ教育について校長自らが講話を行った意義は大きい。今後も「インクルーシブな学校づくり」に期待したい。 ○新しい生活様式の中で、誰もが安心して豊かに生活してくためにどのような行動がふさわしいか、今後も様々な場面で生徒に考えさせられたらよい。 ○生徒指導・支援の効果で、生徒たちが視野の広い人間性豊かな持続力のある活動できる人に育ってほしい。同時に幼児・児童、高齢者や障がい者にもやさしい人になってくれることを祈る。 ○時々歩道を高速で走る自転車を見かけることがある。指導をお願いしたい。 ○外部資源を積極的に活用する方策を一層進め、インクルージョン＆ダイバーシティーの視点をさらに育成していただくことを期待します。	○様々な制限があるなかで、体育祭、文化祭をはじめとする学校行事において、生徒の主体的な活動を支援することができた。また、学校説明会ボランティア通称“霧コンシェルジュ”も学校説明会を中止せざるを得ない状況になかで、学校見学や広報のための動画づくりで活躍を見せた。しかし、何事も教員による詳細な準備が必要であり、生徒が先頭になって働く場面を作ることが課題である。 ○日常的な取組によって、インクルーシブ教育実践推進校であるとの認識が生徒・職員ともども高まってきている。しかし、一人ひとりの実態に合わせた支援体制を構築するためには大変な時間と労力がかかってしまうのが課題である。	○企画立案、企画書作成、目的、理由やエビデンスの提示などは指導しつつも、それぞれを考えさせる時間を長めに取り、生徒同士が議論し、まとめていく場を作っていく。これを繰り返すことにより、主体的な活動をより進化させることが必要である。 ○インクルーシブ教育実践推進校としてのミッションを果たすために、業務の精選をはかる。業務の効率化について、職員提案を募り、実践できるものから実践していく。

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価	総合評価（３月 28 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等	（３月 22 日実施）	成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	①職業的・社会的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育成し、自らの力で生き方を選択し、自己の未来を切り拓いていく力を育てる。 ②生徒一人ひとりが自らの意思によって将来の進路を選択し、自己実現を果たしていくための能力の育成に向けた指導・支援を行うとともに、生徒のあらゆる進路ニーズに対応したキャリア支援教育（進路指導）体制を構築する。	①社会の課題と自己の生き方とを意識した計画的・系統的なキャリア教育を推進し、職業的・社会的自立に必要な力を育成する。 ②生徒一人ひとりがめざす進路実現に向け、目標達成のための学習支援、作文・面接指導、柔軟な校内受験規定の策定、英語を中心とした外部資格・検定の受験促進等を図る。大学受験に関する情報を収集し、生徒及び保護者に適宜発信をしていく。	①全学年で総合的な探究の時間を活用し、各授業で課題解決と表現能力、他者との協働力の育成を図る。 ②継続してキャリアマネジメントの構成のため生徒のポートフォリオの積み重ねを指導することにより、目標の明確化、課題の発見、対策の自覚を促す。 ②校内受験規程の見直しを行う。 ②外部資格・検定（秋の英検）を校内実施し、受験機会を増やす。	①授業や各活動の中で探究的な取り組みが実践できたか。 ②キャリアマネジメントを構成するためのポートフォリオが蓄積でき、それを進路実現のための PDCA サイクルに生かせたか。 ②柔軟な校内受験規程が策定できたか。 ②外部資格・検定への取り組みが増えたか。	①課題の発見と探究活動のアウトプットは概ね達成した。分散登校の影響でグループ活動を抑制したことにより協働の機会は少なかった。 ②・ポートフォリオの蓄積はできているが振り返りが不足している。 ・校内の受験規程を生徒の実態と現況の受験制度に適した内容に変更し策定できた。 ・実用英語技能検定の第 3 回（1 月実施）には 2 級 14 名、準 2 級 48 名と過去最多の受験があった。	①感染予防に留意しながら、ペアやグループでの活動を取り入れていく。 ②学年開きや学期初めの機会を捉え、ポートフォリオの振り返りを行う。	○キャリア教育において、ポートフォリオがますます有効に活用されることを期待したい。小・中学校のキャリアパスポートもぜひ利用してほしい。 ○目の前の進路選択にとらわれ過ぎて狭くなりがちな生徒たちの職業観を広げるような進路指導・支援をさらに進められることを期待します。	○全学年での分野別の説明会の設定や探究学習を通して、卒業後のキャリアについて、現実的に考えさせることができた。 しかし、活動前における目標やねらいの明確化、活動後の振り返りを徹底できなかった ○英語検定をはじめとする技能審査について、挑戦する生徒は確実に増えているが、さらに増やし、校外でも通用する人材を育むことが課題である。	○探究的活動を充実させ、活動の前にこの回の目標やねらいを提示することで意識を高め、活動の後に振り返りを行うことをカスタム化し、それらを蓄積していく。 ○外部資格が大学受験に有利に働くことなどをキャリアガイダンスはもとより、授業やホームルーム活動でも取り上げることで受検者を増やす。
4	地域等との協働	①保護者や地域社会に対し、本校の教育活動についての理解を深めてもらうための積極的な情報発信と学校ＰＲを行っていく。 ②地域との交流や協働、地域貢献等を通じ、地域に開かれ、地域と共にある学校づくりに取り組む。	①学校ホームページ、学校紹介動画、学校説明会、地域連携や行事など通じ、保護者や中学生、地域住民に対し積極的な情報発信を行っていく。 ②コロナ禍でも可能な地域や保護者との連携・協働を模索し、生徒が社会と接続する力をさらに伸長する。	①霧コンシェルジュ等の生徒を中心とした学校説明会を推進する。 ①ＨＰを適切に更新するとともに、内容の充実を図る。 ②生徒会、委員会、部活動・同好会を中心に、対面だけでなく、オンライン等も利用しながら、地域住民との交流や保護者との情報交換を行う。	①学校説明会参加者へのアンケートの結果により、参加者の満足を十分に確認できたか。 ②地域と連携したイベント等を通し、地域との交流を深めることができたか。 ②行事の様子などを保護者に伝えることができたか。	①学校ホームページの充実を図り、その中で、学校説明会が実施できなくても霧コンシェルジュが活躍して広報を実施できた。 ②地域貢献デーを実施し、地域清掃を行った。 ②感染防止の観点からイベントの中止が相次ぐ中、生徒会の若葉台小学校の防犯教室の準備や、吹奏楽部の若葉台商店街での演奏、保育園等へ演奏 DVD を贈るなど、貴重な経験を味わうと共に、今後の交流機会を広げることもできた。	①学校ホームページの更なる充実により来校できない中学生等も満足できる広報をめざす。 ②コロナ禍で可能な交流の調査をより積極的に行う。 ②生徒会を中心に、地域が霧高生とどのような関りを求めているかなど、情報を集め、機会や方策について研究、実践する。	○学校の情報発信の有効な手段として、ホームページの活用のさらなる充実に期待したい。 ○高校生が地域のイベント等に参加すると、地域に活気が出るので、今後も様々な活動を展開していただけるとありがたい。 ○吹奏楽部の若葉台商店街での演奏は皆が楽しみにしています。また、歩道の清掃もやっていただきました。	○学校生活にかかわる多くの動画を制作した。現職教員を多数登場させ、授業の様子を見せることで、本校の教育活動を広く紹介することできた。積極的に授業を開く取組を継続させることが課題である。 ○制約があるなかでも一定の地域交流ができた。今後も制約下でもできる交流を企画計画し実施していくことが課題である。	○すべての教員がオンライン授業を経験しているので、撮られることへの抵抗は小さい。内容を精選することやコラボ授業などを行っていく。 ○地域にどのような貢献ができ、どのように実施し、どのような効果が得られるのかを、職員はもとより、生徒にも質し、生徒の意見を生かした実現可能な活動を行う。
5	学校管理 学校運営	①保護者から信頼され、地域から愛される安心・安全な学校づくりを行う。 ②防災意識を高めるための防災教育を地域や保護者と連携しながら組織的に行っていく。 ③教職員が生き生きと教育活動に取り組むことができるための「働き方改革」をさらに推進していく。	①事故防止会議や職員への声かけを通じ、職員全体の事故・不祥事防止に対する意識を高め、信頼される学校づくりを進める。 ②生徒並びに職員の防災意識をさらに高め、組織的な防災体制と有事を意識した訓練を実施していく。 ③助け合い支え合う職場環境を構築するとともに、積極的な業務改善を図っていく。	①具体的な事例を挙げ、充実した情報発信を、年間を通して行う。 ②校内の組織を機能させるため、実践的な訓練を行う。また、生徒対象の DIG 研修を行い、防災・安全意識を高める。 ③職員が働きやすい環境づくりに積極的に取り組む。職場の声をよく聞き取り、業務改善に生かす。	①具体的で効果的な事故防止会議を、定期的に実施できたか。 ②職員研修、防災訓練を実践的な内容で実施できたか。 ③職場の環境が改善されたか。衛生委員会の定期的な開催、アンケート等により、把握する。	①事故防止会議を具体例を確認しながら定期的に行ことができた。 ②防災に関する職員研修を行い、地震が発生した場合の各人の役割を確認できた。 ③衛生委員会を適宜開催し、職場の環境を改善した。	①事故防止会議の時間の確保が課題である。 ②生徒・教員共に仮設校舎の生活に慣れてより効果的な防災体制を実現させる必要がある。 ④気温の調節などについては未整備である。	○生徒が安全に安心して学校生活を送ることができるように今後も事故防止会議を大切にしてほしい。 ○防災意識をたかめるための研修が有効に働いていると感じられる。 ○「働き方改革」は、今後も全校種・全校で工夫していく必要がある。 ○地域とも防災に対する協力・連携がとれるといいですね。	○通常は例月の職員会議の前に、啓発資料を活用した事故防止会議を持った。あらゆる内容が含まれており、効率的に啓発活動ができたが、教頭が進行役であったため、自分事として考えることが難しいことがあった。いかに身近なものとして、自分事としてとらえられるようにするのが課題である。	○事故防止会議では、グループの持ち回りで、担当グループが直面しそうな「ヒヤリハット」について説明してもらい、それに対して全職員から意見をだしてもらい、想定される事例の共有を行う。